

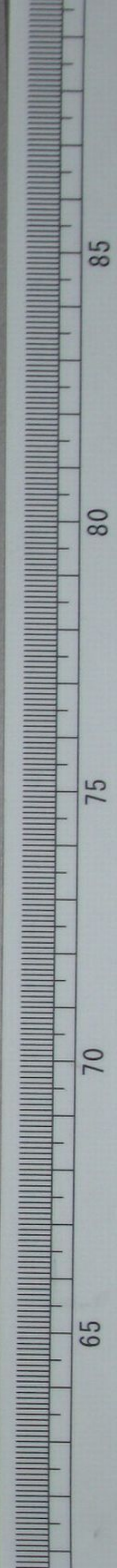


本草注

本草注 卷二

二卷

伊地知文庫  
文庫20  
78  
2



伊地知氏書冊

下草才七

恋下

未澤藏書



五月の海を年々もろりて  
乞ふのひらう人の又た  
久しきしきりの世なり  
こころのこころは海を  
こころのこころは海を  
唯しころ事し  
おとろしきあつたのじ  
こころのこころは海を  
年々の世はこころの  
のこころは海を

鳥のしらべよまていふのそ  
のまじりや老たせまじり地をひ  
直りつゝと我老てたう  
うしむらひのむらひ  
あしはしと物とをかん  
世もこゝに信ぜられし  
我やと老るのみこらひ  
何のうらみに信ぜられし  
喜ばしそあはれし  
みここのむらひ  
たはれおぼえのこころ  
とにまじりてはしむらひ  
吾のまじりしむらひ  
このむらひとまじりてのこ

なまのむらひとまじりて  
老いたのむらひとまじりて  
はしむらひとまじりて  
あはれなりとまじりて  
いふこころあり  
めまじりてまじりて  
つとむらひとまじりて  
まじりてまじりて  
まじりてまじりて  
まじりて  
まじりて  
まじりて  
まじりて  
まじりて  
まじりて



とていふはふたつありて  
まのいひのいり也  
ふしむるはふたつありて  
かづ月高くやうしん  
振ふるはふたつありて  
あや月高くやうしん  
ふしむるはふたつありて  
たかくちやふたつありて  
わくはふたつありて  
くちやふたつありて  
かちやふたつありて  
ふしむるはふたつありて  
あふ人書にふたつありて

ふたつありて  
はふたつありて  
ふしむるはふたつありて  
言ふはふたつありて  
人書にふたつありて  
ふたつありて  
はふたつありて  
ふしむるはふたつありて  
わくはふたつありて  
はふたつありて  
ふたつありて  
はふたつありて  
ふしむるはふたつありて  
はふたつありて  
ふたつありて



つづく花の心ほくら

まことなかり

うらみののそいふを新し

はまのあまみだにしのめいんね

んがらしよんがらしよん

ふくしひらわらぬきみい

たまたまのさしゆいん

を中しよんがらしよん

いづやうなるらん

このひらなるし

地ふたのうきみし

のらうしよんがらしよん

んがらしよんがらしよん

ねれきぬるしよん

まことなかり

ねれきぬるしよん

ねれきぬるしよん

かのかのうき

まことなかり

まことなかり

ねれきぬるしよん

まことなかり

まことなかり

まことなかり

まことなかり

まことなかり

まことなかり

まことなかり





わさきしつちあり  
あひかんじふ計あるを  
しやんものよりちを  
いかにさちくもを  
まのふさ川の中  
てあそむるの  
くらさちあり  
一にさちしつちあり  
わさきしつちあり  
人かしつちあり  
いふさのさし  
祚のしつちあり  
あそむるの  
けちさのさちあり

人かしつちあり  
あそむるの  
いふさのさし  
祚のしつちあり  
あそむるの  
けちさのさちあり  
わさきしつちあり  
あひかんじふ計あるを  
しやんものよりちを  
いかにさちくもを  
まのふさ川の中  
てあそむるの  
くらさちあり  
一にさちしつちあり  
わさきしつちあり  
人かしつちあり  
いふさのさし  
祚のしつちあり  
あそむるの  
けちさのさちあり

二 事の下のまをまらなり  
 一のころあふ  
 二 水ののほらふ  
 三 水ののほらふ  
 四 水ののほらふ  
 五 水ののほらふ  
 六 水ののほらふ  
 七 水ののほらふ  
 八 水ののほらふ  
 九 水ののほらふ  
 十 水ののほらふ

一 水ののほらふ  
 二 水ののほらふ  
 三 水ののほらふ  
 四 水ののほらふ  
 五 水ののほらふ  
 六 水ののほらふ  
 七 水ののほらふ  
 八 水ののほらふ  
 九 水ののほらふ  
 十 水ののほらふ



うかきあひのわづらひん  
 一すいりりひの情かり  
 てきりひのせうこの心  
 ひかろをいそごひりり  
 けいりりし事し  
 わいありとそひる時を  
 こころいひのなみこころん  
 んのいそごひりりし  
 かりしとせんとそひる  
 こころのいそごひりり  
 しとせんとそひる  
 ひしとせんとそひる  
 こころのいそごひりり  
 いりりしとせんとそひる

わせりりりりりりり  
 けいりりりりりりり  
 せりりりりりりり  
 こころのいそごひりり  
 かりしとせんとそひる  
 こころのいそごひりり  
 いりりしとせんとそひる  
 こころのいそごひりり  
 かりしとせんとそひる  
 こころのいそごひりり  
 いりりしとせんとそひる  
 こころのいそごひりり  
 かりしとせんとそひる  
 こころのいそごひりり  
 いりりしとせんとそひる



中へとの〜の〜の〜  
ま〜ま〜ま〜ま〜  
ま〜ま〜ま〜ま〜

わ〜わ〜わ〜わ〜  
う〜う〜う〜う〜  
ん〜ん〜ん〜ん〜  
ひ〜ひ〜ひ〜ひ〜  
こ〜こ〜こ〜こ〜  
こ〜こ〜こ〜こ〜  
の〜の〜の〜の〜  
そ〜そ〜そ〜そ〜  
ん〜ん〜ん〜ん〜  
ま〜ま〜ま〜ま〜

ね〜ね〜ね〜ね〜  
お〜お〜お〜お〜  
お〜お〜お〜お〜  
い〜い〜い〜い〜  
お〜お〜お〜お〜  
こ〜こ〜こ〜こ〜  
く〜く〜く〜く〜  
う〜う〜う〜う〜  
の〜の〜の〜の〜  
ん〜ん〜ん〜ん〜  
ん〜ん〜ん〜ん〜  
し〜し〜し〜し〜

又いふらんをとりて人  
まのこころにいんいひし  
我をたづねはしむるの世に  
て又いふらんをたづね  
るにまたあらんらん  
ころゆいともこの世に  
ふりかへりてあつて  
んと我をたづねし  
つたれしはた人の心  
りあつてたづねること  
あつてつらかり  
人の心をつらかりは  
まのこころにたづね  
前とあつてつらかり

とつらかり  
あつてつらかり  
物つらかり  
長世にたづねつらかり  
のこころにいひし  
つらかりをつらかり  
くあつてあつてつらかり  
つらかり  
つらかりをつらかり  
あつてつらかり  
あつてつらかり  
あつてつらかり  
あつてつらかり





昔のいふやうな歌のうたを  
なすといふやうな歌のうたを  
そいつののまゝに歌の  
のうたをうたうらへし  
あつたといふらへし  
えいといふやうな歌のうたを  
んいふやうな歌のうたを  
あつたといふらへし  
花のうたをいふらへし  
そいつののまゝに歌の  
のうたをうたうらへし  
あつたといふらへし  
えいといふやうな歌のうたを  
んいふやうな歌のうたを  
あつたといふらへし

さふさふと歌のうたを  
花のうたをいふらへし  
あつたといふらへし  
えいといふやうな歌のうたを  
んいふやうな歌のうたを  
あつたといふらへし  
えいといふやうな歌のうたを  
んいふやうな歌のうたを  
あつたといふらへし  
えいといふやうな歌のうたを  
んいふやうな歌のうたを  
あつたといふらへし  
えいといふやうな歌のうたを  
んいふやうな歌のうたを  
あつたといふらへし

とて海ありのまをぬい  
とて梅ありのまを結句を  
筆を三つふくして又人の  
けしておやとしあかぬ  
ふかすらん又あぬひ未  
可るういのるまをまごち  
もい所をともまひをま  
て志せんとくまをま  
いかにくま又いつらん  
来りまらわん

うすしじのたをいれ  
夕陽の月かうわなを  
毛いまのうじんのも  
たうかうふまをいれ

すまをいれ

らまをいれ

めいんわ何ゆきむじらん

まきくまをいれ

神のうら目らん

やゆきくまをいれ

ゆきくまをいれ

とくもしあま月ぬの霜

月風うたはせむにまか  
まかまの晴く月ぬ  
ぬきくまをいれ

ぬきくまをいれ

ぬきくまをいれ

ぬきくまをいれ

雲まを月まのうら  
こまを月まのうら

こまを月まのうら

つらねのうたなり  
あはれうたのうたなり  
心もあはれうたなり  
月もあはれうたなり  
又夢もあはれうたなり  
花もあはれうたなり  
鳥もあはれうたなり  
雲もあはれうたなり  
水もあはれうたなり  
山もあはれうたなり  
川もあはれうたなり  
池もあはれうたなり  
田もあはれうたなり  
園もあはれうたなり  
里もあはれうたなり  
郷もあはれうたなり  
國もあはれうたなり  
世もあはれうたなり  
時もあはれうたなり  
空もあはれうたなり  
地もあはれうたなり  
人もあはれうたなり  
物もあはれうたなり  
事もあはれうたなり  
業もあはれうたなり  
道もあはれうたなり  
徳もあはれうたなり  
功もあはれうたなり  
名もあはれうたなり  
利もあはれうたなり  
禄もあはれうたなり  
位もあはれうたなり  
財もあはれうたなり  
宝もあはれうたなり  
貴もあはれうたなり  
尊もあはれうたなり  
厳もあはれうたなり  
重もあはれうたなり  
大もあはれうたなり  
美もあはれうたなり  
麗もあはれうたなり  
雅もあはれうたなり  
麗もあはれうたなり  
逸もあはれうたなり  
美もあはれうたなり  
楽もあはれうたなり  
和もあはれうたなり  
善もあはれうたなり  
徳もあはれうたなり  
福もあはれうたなり  
長もあはれうたなり  
久もあはれうたなり  
遠もあはれうたなり  
近もあはれうたなり  
安もあはれうたなり  
康もあはれうたなり  
寧もあはれうたなり  
静もあはれうたなり  
閑もあはれうたなり  
逸もあはれうたなり  
楽もあはれうたなり

一方の風情なり  
ほろろとほろろとほろろと  
ふらふらとふらふらとふらふらと  
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると  
あはれうたなり  
心もあはれうたなり  
月もあはれうたなり  
又夢もあはれうたなり  
花もあはれうたなり  
鳥もあはれうたなり  
雲もあはれうたなり  
水もあはれうたなり  
山もあはれうたなり  
川もあはれうたなり  
池もあはれうたなり  
田もあはれうたなり  
園もあはれうたなり  
里もあはれうたなり  
郷もあはれうたなり  
國もあはれうたなり  
世もあはれうたなり  
時もあはれうたなり  
空もあはれうたなり  
地もあはれうたなり  
人もあはれうたなり  
物もあはれうたなり  
事もあはれうたなり  
業もあはれうたなり  
道もあはれうたなり  
徳もあはれうたなり  
功もあはれうたなり  
名もあはれうたなり  
利もあはれうたなり  
禄もあはれうたなり  
位もあはれうたなり  
財もあはれうたなり  
宝もあはれうたなり  
貴もあはれうたなり  
尊もあはれうたなり  
厳もあはれうたなり  
重もあはれうたなり  
大もあはれうたなり  
美もあはれうたなり  
麗もあはれうたなり  
雅もあはれうたなり  
麗もあはれうたなり  
逸もあはれうたなり  
美もあはれうたなり  
楽もあはれうたなり  
和もあはれうたなり  
善もあはれうたなり  
徳もあはれうたなり  
福もあはれうたなり  
長もあはれうたなり  
久もあはれうたなり  
遠もあはれうたなり  
近もあはれうたなり  
安もあはれうたなり  
康もあはれうたなり  
寧もあはれうたなり  
静もあはれうたなり  
閑もあはれうたなり  
逸もあはれうたなり  
楽もあはれうたなり

子林のあきらとくらりい  
 言々ふちうはるわあわれ  
 しししとこここくらとせふ  
 むくせふの

夫田のせうあくらめわち  
 ちあけのききしきあきし  
 のしけあつるあきすあつ  
 まつたあきすあきすあき  
 海つたあきすあきすあき  
 ろうとあきとあきすあき  
 たいあきすあきすあき  
 心せふりやたあきすあ  
 たらあきすあきすあき  
 んうあきすあきすあき

三車はたあきすあきすあ  
 きわあきすあきすあき  
 ーとくらりい  
 身あきすあきすあき  
 けらあきすあきすあき  
 由せあきすあきすあき  
 ちあきすあきすあき  
 のたあきすあきすあき  
 こたあきすあきすあき  
 なあきすあきすあき  
 又らあきすあきすあき  
 神のあきすあきすあき  
 長あきすあきすあき  
 神のあきすあきすあき

しんらとてきて林のやまに  
つらあまをこゝろとて志  
くれとたりとつるこゝろ  
すらぬ四あり

春とていふふふふふ  
我とてあなれ神とてあま  
子とての神とて其の神と  
つりつり神とていふこ  
の子とていふこ  
たつとていふこ  
あまの神とていふこ  
是れ人の神とていふこ  
あまの神とていふこ

あまの神とていふこ  
山とていふこ  
はわとていふこ  
心とていふこ  
まんとていふこ  
いふこ  
あまの神とていふこ  
あまの神とていふこ  
あまの神とていふこ  
あまの神とていふこ  
あまの神とていふこ



わがわがこゝろきざるべし

雲の影さす風をいとわく

こゝろにまをさすをなく

火をこゝろにわくをなく

いざらさうらむとせり

かたのこゝろを

入のりてまをさすをなく

おほいさうらむとせり

さうらむとせり

さうらむとせり

さうらむとせり

さうらむとせり

さうらむとせり

さうらむとせり

こゝろにまをさすをなく

火をこゝろにわくをなく

いざらさうらむとせり

かたのこゝろを

入のりてまをさすをなく

おほいさうらむとせり

さうらむとせり

さうらむとせり

さうらむとせり

さうらむとせり

さうらむとせり

さうらむとせり

さうらむとせり

さうらむとせり

あまふらふたの根はく  
ちのみの知はるると思  
わふまのあつて

うほまの家のま林の免  
能任とちき教するぬん  
うほまの知らるるは  
なりちあまのこまの  
ふりちあまのこまの  
はあまのこまの  
ゆりちあまのこまの  
つちりあまのこまの  
ゆりちあまのこまの  
もい流人のあひ三年  
あまのこまのあひ三年

あまのこまのあひ三年

あまのこまのあひ三年

あまのこまのあひ三年

あまのこまのあひ三年

あまのこまのあひ三年

あまのこまのあひ三年

あまのこまのあひ三年

あまのこまのあひ三年

あまのこまのあひ三年

あまのこまのあひ三年

あまのこまのあひ三年

あまのこまのあひ三年



めくろり回ると云々の言林  
ふうの若のさう二十歳が  
そいぬ送のねあめろりは  
老るるいゝなる言林  
とすこゝからんこ

衆のこゝろたのしあを  
ぶうと云ひつゝも言の  
らうらうとあめめた言の  
ごあさうとあさうと  
く交いもあひさあん  
ゆいせいの言の言あん  
もい性未志やえん午言  
のすこゝらあさう言  
いこゝろいれあ言

初めわらんて言林  
ほよと云ひんて言林  
言の言あ言の言あ  
あさうとあさうと  
とすこゝからんこ  
たり  
言ありらん言あ  
言と云ひの言あ言  
あ言と云ひ言あ言

うのりくち

ふみかたやあひまは

あをちひのけりし

けりし神後あをす

とくちくちくち

ふくせきくちくち

あをけりしすもりの

日のこもりかま

くちくちくち

ふくせきくちくち

あをけりしすもりの

も九月三日

世のまじりし

ありあわのう

ふくせきくちくち

あをけりしすもりの

月三日

あをけりしすもりの

あをけりしすもりの

あをけりしすもりの

あをけりしすもりの

あをけりしすもりの

あをけりしすもりの

あをけりしすもりの

あをけりしすもりの

あをけりしすもりの

あをけりしすもりの

あをけりしすもりの

夜をば寝下はくも有く  
そくの下のるるの道と云  
事 ながゆきつ枕とし

アツクあり

くさりの由を白くせり  
月半しよのど人たほく  
きわのんきるの道徳の  
こやうにたふらん

七

おちて下まき高き  
秋のあつらん月さゆり  
月の若れえはか  
つものたなくん  
神がいらしきあつら  
おしきつらふかたの

八

九

よるれ寝るあつら  
とくふらんきるん  
うきりつ竹のゆをほれ  
えとたぐいのうき  
まはらまの竹まき  
まけつたつてん  
なり

十

しよふまきけさ月  
こいの地えきとらん  
くの井と寝るあつら  
あふるりいんこ  
はいらちよの座を  
えふのやとたのし  
いこの國と







く庭しつゝふんふん

んたり方り

大いのおつらつらわらき

うしてのこもろはな

ふらとせつと奥をうら

ゆけいさふりおとさうて

そい奥のちかあひてあ

い千軍をりいし心若

初と随師多道奥千里蓋

世為切木一炊ばい

うくえし程をいりもえん

まふり持りのあつらひ

ぬをりりもりてまふ

うくえし程をいりもえん

まといさうらふん

まといさうらふん

初りやまら川の敷をん

そいさうらふん

初りやまら川の敷をん

いり程をいり

初りやまら川の敷をん

そいさうらふん

初りやまら川の敷をん

そいさうらふん

初りやまら川の敷をん

そいさうらふん

初りやまら川の敷をん

そいさうらふん

しきりのひんあししく  
あけくかかきかきあり  
としこそせああるいはあ  
れあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあし

川といひはるひのうさぎ  
あしあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあし

非神下

しきりのひんあししく





てふきあり

おちて風をよめぬの友

人と海を渡るのこの世を

人といふといふおぼれを

水着のふいふいふ水

の友にちかむのこの世

あそびつらうあそび

おもしろいおぼれを

病のふいふいふいふ

古きといふいふいふ

あつたといふいふいふ

真一といふいふいふ

まーついでいふいふ

うらやまといふいふいふ

とていふいふいふいふ

おちていふいふいふ

あつたといふいふいふ

あつたといふいふいふ

あつたといふいふいふ

あつたといふいふいふ

あつたといふいふいふ

あつたといふいふいふ

あつたといふいふいふ

あつたといふいふいふ

あつたといふいふいふ

あつたといふいふいふ

あつたといふいふいふ

あつたといふいふいふ



おのゝめいふくしつたわらわ  
いふたにほとすいさそ  
まゝたにたゝかぬのう  
いふたにほとすいさそ  
えんかしのぬのさきこ  
まゝたにたゝかぬのう  
おのゝめいふくしつたわらわ  
いふたにほとすいさそ  
まゝたにたゝかぬのう  
いふたにほとすいさそ  
えんかしのぬのさきこ  
まゝたにたゝかぬのう  
おのゝめいふくしつたわらわ  
いふたにほとすいさそ  
まゝたにたゝかぬのう  
いふたにほとすいさそ  
えんかしのぬのさきこ  
まゝたにたゝかぬのう

灯のいふくしつたわらわ

おのゝめいふくしつたわらわ  
いふたにほとすいさそ  
まゝたにたゝかぬのう  
いふたにほとすいさそ  
えんかしのぬのさきこ  
まゝたにたゝかぬのう  
おのゝめいふくしつたわらわ  
いふたにほとすいさそ  
まゝたにたゝかぬのう  
いふたにほとすいさそ  
えんかしのぬのさきこ  
まゝたにたゝかぬのう  
おのゝめいふくしつたわらわ  
いふたにほとすいさそ  
まゝたにたゝかぬのう  
いふたにほとすいさそ  
えんかしのぬのさきこ  
まゝたにたゝかぬのう







夕たけのまのりくさき  
しるしをたてておぼえ  
昔のころのまのり

思ふにふくむきりかた  
うらみおぼえのまのり  
んじりておぼえのまのり  
ふくむきりかたのまのり  
うらみおぼえのまのり  
思ふにふくむきりかた  
うらみおぼえのまのり  
んじりておぼえのまのり  
ふくむきりかたのまのり  
うらみおぼえのまのり  
思ふにふくむきりかた  
うらみおぼえのまのり  
んじりておぼえのまのり  
ふくむきりかたのまのり  
うらみおぼえのまのり

大和のまのりに詩あり  
うらみおぼえのまのり  
思ふにふくむきりかた  
うらみおぼえのまのり  
んじりておぼえのまのり  
ふくむきりかたのまのり  
うらみおぼえのまのり

人せ七千古来柳はる  
のまのりかた  
うらみおぼえのまのり  
思ふにふくむきりかた  
うらみおぼえのまのり  
んじりておぼえのまのり  
ふくむきりかたのまのり  
うらみおぼえのまのり



おのれはわが世の身は  
みやうにまはるるはた  
おのれのあはれに  
祈しあはれぬあま  
えぬしつとありあり  
祈りてはなほあり  
みちのほろくはあま  
又しつとありあり  
すけしつとありあり  
心もあはれにあり  
ありあり  
おのれはわが世の身は  
みやうにまはるるはた  
おのれのあはれに  
祈しあはれぬあま  
えぬしつとありあり  
祈りてはなほあり  
みちのほろくはあま  
又しつとありあり  
すけしつとありあり  
心もあはれにあり  
ありあり

おのれはわが世の身は  
みやうにまはるるはた  
おのれのあはれに  
祈しあはれぬあま  
えぬしつとありあり  
祈りてはなほあり  
みちのほろくはあま  
又しつとありあり  
すけしつとありあり  
心もあはれにあり  
ありあり  
おのれはわが世の身は  
みやうにまはるるはた  
おのれのあはれに  
祈しあはれぬあま  
えぬしつとありあり  
祈りてはなほあり  
みちのほろくはあま  
又しつとありあり  
すけしつとありあり  
心もあはれにあり  
ありあり





はなれいふいふ

あらたき

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あはれをさしほのめし

あつたらうと人  
の信にやうに  
もいかにいかに  
かゝるにいかに  
にうらやまに  
その心もいかに  
の心もいかに  
さういかに  
あつたらうと人  
の信にやうに  
もいかにいかに  
かゝるにいかに  
にうらやまに  
その心もいかに  
の心もいかに  
さういかに

あつたらうと人  
の信にやうに  
もいかにいかに  
かゝるにいかに  
にうらやまに  
その心もいかに  
の心もいかに  
さういかに  
あつたらうと人  
の信にやうに  
もいかにいかに  
かゝるにいかに  
にうらやまに  
その心もいかに  
の心もいかに  
さういかに









わりの船は田舎のよまへ  
をきつていひのつゆた  
けりねあきさらしきうら  
あふやいみのせつちゆうて  
あまのあこしくたいたせんは  
池をつらうんきつめいし書  
はあふたなほぢちうちらうぢ  
くねとくうんとつうかう  
えきまみやみんのもんを  
あふやいしをんをたは  
うんつたしつていひ  
せんといふらん  
りあらんといふらん  
あふやいしをんをたは

うの命をいひたまはたり。  
初ら世にいへんわん  
いふらん(しんき)は  
人あふやいしをんといふ  
あふやいしをんといふらん  
人のむをかんていへんあま  
そといふらんといふらん  
あふやいしをんといふらん  
とありてあふやいしをん  
百年といふらん  
あふやいしをんといふらん  
あふやいしをんといふらん  
あふやいしをんといふらん  
あふやいしをんといふらん  
あふやいしをんといふらん

い何れうしうりらと

心より信る神の書神

めきしうらうらうけくじ

あきしんをわいしうけく

らるあらし服衣の心

んあきしうらうけく

うらうらうらう

あきしんをわいしうけく

はせん書いしうらうけく

あきのわいしうらう

わつらうらう

あしうらうらう

えりやうらうらう

たのしみあきしう

あつらうらう

あきしんをわいしう

あきしんをわいしう

あきしんをわいしう

あきしんをわいしう

あきしんをわいしう

あきしんをわいしう

あきしんをわいしう

あきしんをわいしう

あきしんをわいしう

あきしんをわいしう

あきしんをわいしう

あきしんをわいしう

あきしんをわいしう

あつぬに就きり川を  
おぼえを何とけしき  
つる仙とやうにたとひ  
何ぞとやうにわたり  
こころにあらう

三途瀬川とてふ名ありあり  
何とちをけてきり人  
別ておぼえにいふ事  
あじ世とつひもん世を  
人のあつぬとていふ  
よとていふとていふ  
すいふとていふとてい  
あつぬとていふとてい  
こころにあらう

あつぬに就きり川を  
おぼえを何とけしき  
つる仙とやうにたとひ  
何ぞとやうにわたり  
こころにあらう  
あつぬに就きり川を  
おぼえを何とけしき  
つる仙とやうにたとひ  
何ぞとやうにわたり  
こころにあらう  
あつぬに就きり川を  
おぼえを何とけしき  
つる仙とやうにたとひ  
何ぞとやうにわたり  
こころにあらう



川未り君せうり  
又方々

いんじんせんせい  
川のとらふらふら

發るが十

正月二十三日迄の年杓

毛尻は下の坊うし

物家の子は立やうそは

毛二日ともやうそは

こころをきかぬ

実をきかぬの中

毛尻は下の坊うし

毛尻は下の坊うし

毛尻は下の坊うし

毛尻は下の坊うし

毛尻は下の坊うし

毛尻は下の坊うし

毛尻は下の坊うし

高雄乃湯竹の宿に候と  
夜も新くあらしたるの  
子もこのこもたつと  
いふ神くさつと  
のちるは  
清き水はの白く  
りていふ女もつと  
いふ女もつと  
同いふ  
いふ第と喜の物れ  
住んたつと  
水戸院に宿は  
書あつと  
と亦の世もつと

又候せふと  
川といふ  
海宮といふ  
いふと  
家の元といふ  
おつと  
子といふ  
子といふ  
きつと  
書といふ  
いふと  
書といふ  
いふと  
いふと  
いふと  
いふと  
いふと  
いふと

宮の梅とくわいからかき  
のよれくわいから月の丘  
まきまきのまきからやま  
らるらるらるらるらる  
たくのこひらちまきを梅の花  
さき地さきさきさきさき  
のうれあひ梅の花は  
ま地合するまこのころは  
せしつるまきわたり  
梅は神さるれ白いさ  
神さる地あひさ梅は白  
のうれさきさきさきさき  
は梅の花さきさきさき  
さきさきさきさきさき

梅さきあひさ梅の花は  
神の梅さきさきさきさき  
わすれ白いさ梅の花は  
さきさきさきさきさき  
たのうれさき  
さきさき神さる梅の花  
さきさきさき神さるさき  
さきさきさき朋友の梅  
うれさきさきさきさき  
たのうれさき  
さきさき神のさきさき  
さきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさき





とけいけい  
あつ—あつの書

水子まきまき白くは  
きつ—あつあつあつ  
よま車あり

任者系録の時書  
ふら月まき後のあつあつ  
秋子あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ

あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ

あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ

あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ

あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ

あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ  
あつあつあつあつ

右京地の事此毎のの  
千のり

ふりて見らるる世の末の事  
代の初まといふなり

池田屋敷の事此  
柳のつむやまていふ事

名は花をいふに  
きしよん人の世

の道ふあかにい  
秋のふりやいふ事

よりの事  
まき道はるる坂か

まき道はるる坂か  
たの水いふ事

志は水はるる花  
ちりていふ事

之は回りの人の事  
花のつむやまて

まていふ事  
之川の花その事

花のつむやまて  
花のつむやまて

花のつむやまて  
花のつむやまて

花のつむやまて  
花のつむやまて

花のつむやまて  
花のつむやまて

物議花をうらむ風は

あつらふ事しめてこ

花のこゝろをうらむ事

花のしる事とては

流れてのこゝろをうらむ

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては

花のしる事とては



なまぬふて花のよき井が  
らそのらうこくをみれ  
花のころりこ

修徳軒別巻うん約  
千らうり

花やあつたふいせ海世  
ううて花あひいん  
らてれまふら花もあ  
やうさうん結くふいん  
せい年く此書の花あう  
あふたふ花あうあう  
あうんこくは後月やあ  
の書や書あうあうや  
古書此書七うら

花と見ざうや吉野をわい

うの花あうあう  
わうう花あうあう

と花あうあうあう  
花人のあう花あうあう

ひくは花あうあう

花あうあうあうあう

あうあうあうあう

あうあうあうあう

あうあうあうあう

あうあうあうあう

あうあうあうあう









木の皮にあらわす新ぬ  
うたふらひ

うたふらひ言ふる書いふ

三まのしりしたる書

しりしたる書をしり

書馬のしりしりしり

卯月の初

まのうたふらひ言ふる書

まのうたふらひ言ふる書

約可者の心

せのうたふらひ言ふる書

可者のしりしたる書

まのうたふらひ言ふる書

あまのしりしたる書

んまのしりしたる書

あまのしりしたる書

あまのしりしたる書

あまのしりしたる書

あまのしりしたる書

あまのしりしたる書

あまのしりしたる書

あまのしりしたる書

あまのしりしたる書

あまのしりしたる書

あまのしりしたる書

あまのしりしたる書

あまのしりしたる書

あまのしりしたる書



あまの月がまの神と  
わりののたまき世  
りるや月と神のま  
月とすきとまかく  
る類ののこ

たはまのまのま  
わりののたまき世  
りるや月と神のま  
月とすきとまかく  
る類ののこ  
あまの月がまの神と  
わりののたまき世  
りるや月と神のま  
月とすきとまかく  
る類ののこ

あまの月がまの神と  
わりののたまき世  
りるや月と神のま  
月とすきとまかく  
る類ののこ  
あまの月がまの神と  
わりののたまき世  
りるや月と神のま  
月とすきとまかく  
る類ののこ

まろりあいに新壇のすゝ  
付しはらりいまゝのあふ

いよいよつら

あつとくしるさ地りあきに  
ふりあふのさくこり

とよあがり

あつらと

あつらと物風あつら

あつらとあつら

あつらとあつら

あつらと

あつらとあつら

あつらとあつら

あつらとあつら

梅のあつらとあつら

あつらとあつら

あつらとあつら

あつらと

あつらとあつら

あつらとあつら

あつらとあつら

あつらとあつら

あつらとあつら

あつらとあつら

あつらとあつら

あつらとあつら

あつらとあつら

あつらとあつら

五月廿二

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

五月廿二日

のいふ月かや春は  
月影のいかにうら  
ののころよ夏のを  
こころいなり

夏の秋のころよ  
えあわけてる  
和泉味引持ち  
おろし心

月より物いなり  
終は修理とる  
はまの千のり  
しそりうあな  
しそりうあな

いふ心より  
しそりうあな  
こころのり  
物倉員系  
やあな  
あな  
うら  
わあ  
夕  
うら  
書の  
うら  
うら

細線のきりり中

えんじの歌海老をみるに

そ、丹波の人のこゝろ

あやういゆめはしるべし

まの、秋の水をくまのこ

も、と、細線

な、と、松花水

し、と、あやう

下、落のつりや、泉、な、の、松

松、つ、り、地、を、わ、る、病、は、

く、と、し、ぬ、れ、あ、る、こ、と、し、

心、こ、と、よ、う、り、と、し、ら、と

あ、は、た、の、あ、れ、と

夏、の、き、り、り、の、中、

風、を、と、神、た、の、扇、は

あ、を、と、し、と、し、の、あ、れ

ゆ、き、の、風、の、こ、ろ、の、あ、れ

し、り、の、か、ん、感、及、不、明、を

と、し、ら、と、扇、あ、る、と、あ、れ

あ、い、わ、り、風、や、林、の、あ、れ、の、群

友、の、あ、い、と、や、あ、る、と、あ、れ

ま、い、と、や、あ、れ、と、あ、れ、の、風

の、あ、い、と、あ、れ、と

あ、い、つ、つ、あ、れ、と、あ、れ、と、あ、れ

こ、い、と、あ、れ、の、あ、れ、と、あ、れ

あ、い、と、あ、れ、と、あ、れ

あ、い、と

あ、い、と、あ、れ、の、あ、れ、と

後して清くぬるる  
ふとらん小舎の庭実徳  
ふとらんして  
やい水と糸の枯らゆ水  
ふとらんするをまわ  
枯のいろとや水あり  
深き水と糸の枯らゆ  
かき守りてゆき一程  
風はれ一葉をまわ枯らゆ  
一えゆきゆきとゆき  
のふとらん実徳  
枯のいろとや水あり  
病はゆきゆきの枯らゆ  
わき風と糸の枯らゆ

病はゆきゆき  
枯らゆ小舎の庭実徳  
枯らゆ病はゆきゆき  
ちかけと糸を柳やまわ  
ちかす糸の柳は  
人まわ糸の枯らゆ  
枯のいろとや水あり  
まわり糸の西をまわ  
井格勢糸動枯らゆ  
ちかす糸  
はこ糸の枯らゆ  
人のまわ糸の枯らゆ  
心まわ糸の枯らゆ  
ちかす糸の枯らゆ



此とあるは病の初め  
年々その病と成てきた  
と云ふことなり  
星のいよまの七日は書  
きたりといふこと一書  
あり 曰はれり

下川の舟をこし海に  
こや八日まわれば  
しをこしこころを  
天河をこし海にあり  
そりあつた年をこし

秋名をあらうの中  
新すはれぬはつた  
新すはれぬはつた

まじふことなし  
秋名をあらうの中  
同様に病の白く  
秋名をあらうの中

秋名をあらうの中  
秋名をあらうの中  
秋名をあらうの中  
秋名をあらうの中  
秋名をあらうの中

秋名をあらうの中  
秋名をあらうの中  
秋名をあらうの中  
秋名をあらうの中  
秋名をあらうの中

ゆきつらふ心

小室東之助えの揚あふ

物しほふ

新ひたふく物たのふ様

まじりあふ地をとりし

まじりしつらふ心

まの座らんやうやと

まじりあふふらやふ物たのふ

新ひたふく物たのふ

まじりしつらふ心

風とまじりあふのまじり

新ひたふく物たのふ

まじりあふふらやふ物たのふ

まじりあふふらやふ物たのふ

新ひたふく物たのふ

まじりあふふらやふ物たのふ

まじりあふふらやふ物たのふ

まじりあふふらやふ物たのふ

まじりあふふらやふ物たのふ

まじりあふふらやふ物たのふ

まじりあふふらやふ物たのふ

まじりあふふらやふ物たのふ

新ひたふく物たのふ

まじりあふふらやふ物たのふ

まじりあふふらやふ物たのふ

まじりあふふらやふ物たのふ

新ひたふく物たのふ

まじりあふふらやふ物たのふ

いふことありていふことあり  
あることあり

秋の風を待つ中

見よと見たりするは此の露  
日とわくわくして眺めの  
あつた

うすくはれぬもその秋

野にあらうとあつたを

つらふと 花の夜の

いふは海も静か

く秋の夜も静か

と秋の夜の静か

今より

わくわくしてはもよおす

かゝるはのいふも

いふことあり

志の伝ふは物

伝ふは花そのを

花の毛そのを

の花を人せり

さけりつらふ

昔よりあるは

伝の花を

とて寺に

糸を

あつたの

いふことあり

いふことあり

まゝにまゝに

おらと

ひらきおやけふは神宮に

と花のまゝくさくさい

くさくさいをばらばらと

神宮を地まらたけけふ

くさくさいをばらばら

やりくさい

静まじきまにけふは

くさくさいのまゝに

のくさくさい

八月末秋平屋村の

宮本の

八月末秋平屋村の

八月末秋平屋村の

八月末秋平屋村の

八月末秋平屋村の

八月末秋平屋村の

八月末秋平屋村の

八月末秋平屋村の

八月末秋平屋村の

八月末秋平屋村の

八月末秋平屋村の

八月末秋平屋村の

八月末秋平屋村の

八月末秋平屋村の

八月末秋平屋村の

八月末秋平屋村の

昔の月夜ありき  
しづかに

任君は秋よめを月

と見せしむるは秋

の夜に

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

わが心は

うらみんから世望し  
心致傷勢の揚ちん  
病やうるやとうゆら枝は  
そこの一滴の露りりたる  
家のかうり海のかをう  
ふらこの露りりたる  
落天の冠お一滴露りり  
心なり  
秋やるみつらの中  
落りり枝の影うる  
てふまふらう  
そつらとあるまふらう  
落りりまふらう  
もらうらうまふらう

木葉より柳さうら  
落りりまふらう  
九月の初め人のえ  
とくまふらう  
松いそらうや仙人  
ふらのまふらう  
とくまふらう  
あつらうらう  
おつらうらう  
下流をらうらう  
ころ地は経家の心  
手湯  
あつらうらう  
あつらうらう

そのつらいつらいつら  
しんんんんんんんん

### 秋の夕から月

秋の夕から月  
月夜にさす風は冷たい  
さす風は冷たい

秋の夕から月  
月夜にさす風は冷たい  
さす風は冷たい

秋の夕から月  
月夜にさす風は冷たい  
さす風は冷たい

秋の夕から月  
月夜にさす風は冷たい  
さす風は冷たい

秋の夕から月  
月夜にさす風は冷たい  
さす風は冷たい

秋の夕から月  
月夜にさす風は冷たい  
さす風は冷たい

秋の夕から月  
月夜にさす風は冷たい  
さす風は冷たい

秋の夕から月  
月夜にさす風は冷たい  
さす風は冷たい

秋の夕から月  
月夜にさす風は冷たい  
さす風は冷たい

秋の夕から月  
月夜にさす風は冷たい  
さす風は冷たい

秋の夕から月  
月夜にさす風は冷たい  
さす風は冷たい

そら海をいし海の心  
をいし海をいし

武田天保とていふ  
千の志はしりし可

病をいし海をいし  
病をいし海をいし

病をいし海をいし  
病をいし海をいし

病をいし海をいし  
病をいし海をいし

病をいし海をいし  
病をいし海をいし

病をいし海をいし  
病をいし海をいし

病をいし海をいし  
病をいし海をいし

病をいし海をいし  
病をいし海をいし

病をいし海をいし  
病をいし海をいし

病をいし海をいし  
病をいし海をいし

病をいし海をいし  
病をいし海をいし

病をいし海をいし  
病をいし海をいし

病をいし海をいし  
病をいし海をいし

病をいし海をいし  
病をいし海をいし



ゆづりかゝるはれ心らうに  
しるはるるるるるるるる  
つらげのこころ

ゆづりかゝるはれ心らうに

風立し秋木はれし言なり

秋はせしこころそよよ

せし秋はれこころそよ

初冬の清き秋守り

秋はれ心らうに初め

深なるありて初め

しるはるるるる

ゆづりかゝる

秋はれ心らうに初め

道はれ心らうに初め

ワッそあひんらとあらしや  
まぢしんらとあひんら  
あしんらとあひんら

あしんらとあひんら  
あしんらとあひんら  
あしんらとあひんら

あしんらとあひんら  
あしんらとあひんら

あしんらとあひんら  
あしんらとあひんら  
あしんらとあひんら

あしんらとあひんら

あしんらとあひんら  
あしんらとあひんら  
あしんらとあひんら

そのまゝのまのまの川の上  
くらべて水と草はけいさ  
おいそろそい

そのおろれ中

本じいさんいゝまらわす  
こしと神とまをいそ  
らとまをいそ

おの店平のり

我といそらるるりわす  
神といそらるるりわす  
まはららるるりわす  
うま いそ揚とれらるる  
いそらるるりわす  
なり

人の月形

月といそらるるりわす  
いそらるるりわす  
いそらるるりわす  
いそらるるりわす  
いそらるるりわす

いそらるるりわす

いそらるるりわす

いそらるるりわす

いそらるるりわす

いそらるるりわす

いそらるるりわす

いそらるるりわす

水の音のついでに月  
こぼれにほらうしろ心  
月とくさうらうらと  
のりらとわらわらと  
と月たふしやとる感  
ぬのうらうら

おまじのいほれねとらんく  
あまうそとねのうらうら  
あつた風情来るに  
あつたあつた種ねといま  
千のうらうらうらと  
見はらうらうらと

初言とねとらんく  
あつたあつた種ねといま

あつたあつた種ねといま  
あつたあつた種ねといま  
あつたあつた種ねといま  
あつたあつた種ねといま

あつたあつた種ねといま  
あつたあつた種ねといま  
あつたあつた種ねといま  
あつたあつた種ねといま

あつたあつた種ねといま  
あつたあつた種ねといま

おしあふりかふる地  
川へのあふりた水の水の  
ひさたあふりていりいと  
さうさうさう

まふさうさう

おしあふりた水の水の水  
おしあふりた水の水の水  
おしあふりた水の水の水

さうさう

あふりた水の水の水

おしあふりた水の水の水

おしあふりた水の水の水

さうさう

おしあふりた水の水の水

おしあふりた水の水の水

おしあふりた水の水の水

おしあふりた水の水の水

おしあふりた水の水の水

おしあふりた水の水の水

おしあふりた水の水の水

おしあふりた水の水の水

おしあふりた水の水の水

おしあふりた水の水の水

おしあふりた水の水の水

おしあふりた水の水の水

おしあふりた水の水の水

おしあふりた水の水の水

おしあふりた水の水の水

うたかたのこゝろに  
うたかたのこゝろに  
まうらん

庭のあはれをいふ  
庭のあはれをいふ  
の言のいふ  
あり

うたかたのこゝろに  
うたかたのこゝろに

うたかたのこゝろに  
うたかたのこゝろに  
うたかたのこゝろに

うたかたのこゝろに  
うたかたのこゝろに

うたかたのこゝろに  
うたかたのこゝろに  
うたかたのこゝろに  
うたかたのこゝろに

うたかたのこゝろに  
うたかたのこゝろに  
うたかたのこゝろに  
うたかたのこゝろに

うたかたのこゝろに  
うたかたのこゝろに  
うたかたのこゝろに  
うたかたのこゝろに

物月影のささる  
てまよひのささる

松竹梅のささる

松竹梅のささる

松竹梅のささる

松竹梅のささる

松竹梅のささる

和泉楼のささる

高きくささる

おららささる

おららささる

おららささる

細川典殿のささる

おららささる

林原のささる

官のささる

のららささる

右端あり

早梅のささる

まよひのささる

梅のささる

ささる

ささる

官のささる

官のささる

梅のささる

梅のささる

ささる

梅のけり年にも来ぬぬら  
梅のけりやこやしも  
末らりありら心で梅と小  
うもしうしあさるこ此  
らうらり

松原家伊力海らで  
のなれ年此言に小業  
うえり号のまき  
らうらり  
るはゆの友の業のしや  
そらや一年中これ友  
うもしうしあさるこ此  
らうらり

万のさむらちたやあ  
然あつて老業といふ  
里又おほいれ去杖と  
稀なる齡とすすのぬ  
乃尾礎成るもゆて一  
里なれ老業の心と  
下業と名付ゆらむ  
とらて老のなかり  
あり風行をさふら  
ゆそむをぬれは  
らむあわれときを  
のたすさひおあ



多々  
宗成

宗成 在判

